

従軍看護婦 秋山みよ

那珂市歴史民俗資料館



明治22年(1889)7月28日那珂市額田東郷42番地に生まれ、明治41年(1908)日本赤十字社に入社して看護婦の道をスタートした。

大正8年(1919)1月18日、第一次世界大戦後のパリ講和会議が開催された。翌大正9年(1920)3月13日、ソビエト連邦のバルチザンニコラエスク(尼港)の日本軍を武装解除し、5月25日には日本軍人や居留民を殺害する暴挙が行われた(尼港事件)。大正9年10月、日本軍のシベリア出兵に際し、秋山みよは救護班救護看護婦長として召集され、シベリア大陸の酷寒・酷熱のもとで救護活動に従事し、よくその任務を果たした。また、全国各地の大小さまざま災害救護にもしばしば出動し、よくその責務を遂行した。

昭和12年(1937)の日華事変の勃発に際しては、救護看護婦長として病院船に配属され、戦傷病兵士の輸送に当たること数十回、患者に対する懇切なる看護、部下看護婦への指導、統率抜群であった。しかし、日本と中国との間に激しい紛争が続く昭和14(1939)10月26日、無念にも戦陣に散華された。これにより、明治勲章の勲8等宝冠章を授けられた。現在、この勲章は、徳川記念章・略章とともに日本赤十字社茨城県支社の展示室に展示されている。また、額田村ではその功に対し村葬を以て報いた(法名：報国院釋尼妙蓮大姉)。



(秋山みよの勲章、勲記など)



(秋山みよの墓／上宮寺)

ところで、日本赤十字社救護看護婦の養成に大きな関心を持っていた石黒忠恵男爵は、日赤病院の看護婦のうち学術・勤務優秀、さらに患者に対し懇切なものに贈ってほしいと、日赤本社に「ナイチンゲール石黒記念牌」を贈呈し、その授与は明治43年(1910)から昭和29年(1954)まで続いた。茨城支部関係では11名が受賞しているが、秋山みよもその一人である。

なお、明治33年(1900)に起こった清国の義和団事件において、日赤看護婦が初めて海外で救護活動を行ったが、この年、水戸市出身の小池くに(明治2年生まれ／31歳)は広島陸軍病院勤務を命じられ、戦傷病兵士の救護に従事した。これが、茨城支部から派遣された看護婦による最初の救護活動と思われる。その後、日露戦争では茨城支部編成の第26救護班救護看護婦長として、陸軍病院船ロセッタ丸・土洋丸、琴平丸に乗船勤務、大連・営口・元山などへ38回にわたる航海を行い、多数の傷病兵士の救護・護送に従事した。